

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：42502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00157

研究課題名（和文）楽書『教訓抄』全注釈のための基盤形成

研究課題名（英文）Studies that form the basis for all the annotations in Kyokunsho, a 13th century music book

研究代表者

正道寺 康子（Shodoji, Yasuko）

聖徳大学短期大学部・総合文化学科・教授

研究者番号：70320702

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の最終目標は、『教訓抄』の全体像を明らかにすることである。そのための基盤となる研究として、『教訓抄』全10巻の本文校訂および書き下し文、難解な語句の注釈、現代語訳を試みた。全10巻の現代語訳は本邦初であり、『教訓抄』が広く一般にも容易に読めるようにした。また、副次的な研究として、『教訓抄』が成立した鎌倉時代と奈良・平安時代の外来音楽の差異を明かにし、平安文学に描かれた音楽についても考察した。これらの研究成果は、国際シンポジウム・公開講演会での発表、論文執筆、図書の発行で公開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『教訓抄』全10巻の現代語訳をしたことで、格段に『教訓抄』を読みやすくしたことが最大の研究成果である。今後は、一般にも『教訓抄』が読まれ、『教訓抄』や鎌倉時代の雅楽曲の実態への理解が深まると考えられる。また、粕近眞が書き留めた口伝や古記録への研究も活発になっていくことが予測される。

『教訓抄』研究は、奈良・平安時代の外来音楽の実態解明にも寄与し、平安時代の古記録や文学作品に登場する唐楽・高麗楽の研究にも進展があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The ultimate goal of this research project is to clarify the entirety of the Lessons Learned. As the basis for this research, we have attempted to revise the text of all ten volumes of Kyokunsho and translate them into modern Japanese, as well as to write down the text and annotate difficult words and phrases. This is the first modern translation of all 10 volumes in Japan, and has made it easier for the general public to read Kyokunsho. As a secondary study, we also clarified the differences in foreign music between the Kamakura period and the Nara and Heian periods, and examined the music depicted in Heian literature. The results of these studies have been made public through presentations at international symposia and public lectures, the writing of articles and the publication of books.

研究分野：日本文学

キーワード：楽書 教訓抄 音楽伝承 日本音楽史 日本古典文学 雅楽 現代語訳

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで『源氏物語』などに登場する音楽を理解するために、中世の楽書・狛近眞の『教訓抄』10巻(1223年成立)が部分的に引用されてきたが、果たしてそのような利用の仕方では、平安文学に描かれた音楽が正確に理解できるのだろうかという疑問を持ったことが、本研究課題の出発点である。例えば、新編日本古典文学全集『うつほ物語』(小学館)の「万歳楽」の頭注(116頁)に「舞はもとは女楽六人舞であったが、後に童舞となり、さらに男舞となった」とあるが、平安文学において女舞の万歳楽の記述はない。また、『源氏物語』に描かれた舞楽「青海波」の再現・復元は鎌倉時代の古楽譜に基づくが、『源氏物語』が成った時代の舞楽「青海波」そのものでもない。平安文学の音楽を読み解くためには、奈良・平安時代の外来音楽の実態の解明が急がれる。そのためにも、まず『教訓抄』を正確に理解することが重要かつ必要ではないかと考えた。

雅楽研究は遠藤徹氏(東京学芸大学教授)や寺本直子氏(神戸大学大学院教授)、古楽譜の研究は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターやスティーヴン・G・ネルソン氏(法政大学文学部教授)、楽書の歴史的研究は磯水絵氏(二松学舎大学名誉教授)などによって進められてきた。楽書研究に注目すると、中原香苗氏(神戸学院大学講師)の科学研究費・基盤研究(C)課題番号:25370248(2013~2016年)、同・課題番号:22K00355(2022~2024年)や、磯水絵氏の二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」(2004~2009年)がある。最近の研究成果としては、神田邦彦著『中世楽書の基礎的研究』(和泉書院、2017年)、磯水絵編『興福寺に鳴り響いた音楽 教訓抄の世界』(思文閣出版、2021年)、福島和夫編『歴史学としての日本音楽史研究』(和泉書院、2022年)、磯水絵著『文学と歴史と音楽と』(和泉書院、2023年)等がある。すばらしい研究成果であるが、『教訓抄』の全体像を一般に分かりやすく説いたものは少なく、一般人が楽書や『教訓抄』を理解しようとする時、聊か難解である。

また、小学校音楽教育に「雅楽」が導入されていることもあり、昨今、日本の伝統音楽としての「雅楽」は若い年代にも浸透しつつあり、入門的な雅楽曲の解説書も刊行になっている。しかし、それらの多くは中世以降の楽書を部分的にピックアップして雅楽曲を解説したものであり、『教訓抄』の全体像を知るにはほど遠い。

『教訓抄』は雅楽曲の解説に安易に引用されるべきではなく、『教訓抄』の全体像を把握する段階に来ているのではないかと考えるようになった。ちょうどその頃、宮崎和廣氏(1962~2016)の『教訓抄』研究が宮崎氏の急逝により頓挫したことから、研究代表者:正道寺康子(聖徳大学短期大学部教授)は、『教訓抄』全10巻の現代語訳の公刊を継承した。

2. 研究の目的

『教訓抄』の全体像を明らかにすることが、本研究課題の目的である。そのための基盤となる研究として、『教訓抄』全10巻の本文校訂および書き下し文、難解な語句の注釈、現代語訳を試みた。全10巻の現代語訳は本邦初であり、『教訓抄』が広く一般にも容易に読めるようになることを期待した。

『教訓抄』を丁寧に読むことで、楽書における『教訓抄』の位置づけ、中世の音楽環境の実態、現代の「雅楽」実演と過去の実態との差異、楽書と説話・王朝物語などとの関連をも明らかにし得ると考え、楽書研究と文学研究、雅楽師・研究者・一般三者の橋渡しとなることも目論んだ。

3. 研究の方法

本研究は、個人研究(『教訓抄』の本文校訂・語釈作業・現代語訳、研究論文執筆)と共同研究(調査、研究会・シンポジウム等の開催)を連携させて展開した。

研究代表者1名では研究遂行に膨大な時間を要するため、研究分担者:森野正弘(山口大学大学院東アジア研究科教授)および研究協力者:上原作和(一般社団法人桃源文庫日本学研究所教授)・笹生美貴子(日本大学国際関係学部准教授)を加えた計4名で、2016年より『教訓抄』の研究を開始し、文献収集に努め研究史を把握した。本研究課題が採択されたのはその2年後である。

『教訓抄』の校訂本文は、宮内庁書陵部本(室町前期頃の写本)や岩波思想大系本(『日本思想大系23 古代中世芸術論』、岩波書店、内閣文庫蔵本・神田喜一郎旧蔵本を底本とした翻刻)などを比較・勘案しつつ作成した。その後、書き下し文を作成した上で、注釈を付し現代語訳をした。

現代語訳の担当は、笹生美貴子が巻1・巻5、正道寺康子が巻2・巻6・巻10、上原作和が巻3・巻7・巻9後半、森野正弘が巻4・巻8・巻9前半である。現代語訳は原文に忠実にを行い、使用漢字も原文を活かした。

現代語訳の作業については2020年度より毎月Zoomを用いたオンラインで検討し、年に1~2度対面で重要事項を検討した。オンライン検討会では、雅楽関係の書籍を多く出版している書肆フローラの遠藤知子氏にも加わっていただいた。

伝来当時の外来音楽の実態を知るために、毎年正倉院展見学を実施し、井伊家伝来典籍『教訓抄』を所蔵している彦根城博物館も調査した。研究期間中、研究代表者は主に関東圏で開催されている「雅楽」公演を毎月見学し、「雅楽」への理解を深めた。

4. 研究成果

コロナ禍により当初の予定より研究期間を1年延長したが、最終目標である『教訓抄』全10巻の現代語訳を完成させることができた。

研究期間中の成果は前述に加え、国際シンポジウムにおける研究発表2回、公開講演会1回、学会研究発表1本、研究論文・解説書・書評等執筆13本である。

(1) 2018年より『教訓抄』全10巻の本文校訂に1年間、書き下し文に2年間を当てて作成した上で、残りの3年間で現代語訳を完成させた。現代語訳には語釈を付してある。現代語訳・語釈は、『『教訓抄』語釈・現代語訳』④(2024年3月、372頁)、『『教訓抄』語釈・現代語訳』⑤(同、322頁)に公開し、研究者などに配布したが、印刷部数が各40部であったため、今後はさらに広く一般に公開することを計画している。校訂本文や書き下し文についても近い将来、ウェブサイトなどを通じて公開したい。

全10巻の現代語訳の完成によって、『教訓抄』の全体像がより明確になったことが最大の研究成果である。狛家に伝わる「嫡家相伝舞曲物語」(巻1～巻3)を始め他家に伝わった「他家舞曲相伝物語」(巻4)・「高麗曲物語」(巻5)・「舞の無い曲の楽の物語」(巻6)では曲の由来や秘説、「舞曲源物語・案譜名目・舞姿法・舞出入様・番舞・鶏婁一鼓口伝法・舞奏進様」(巻7)では楽曲の起源や舞の心得、「管絃物語」(巻8)・「打物部 口伝物語」(巻9)・『打物案譜』の法 口伝の記録」(巻10)では楽器や楽譜の解説がされており、狛近真が伝承した曲の口伝だけでなく、古記録等からも諸説を集めて雅楽曲のすべてを網羅するべく記されているが、『教訓抄』の現代語訳はその詳細と全体像を明らかにすることができた。

(2) 『教訓抄』成立以前の奈良・平安時代の唐楽・高麗楽の諸相を明らかにすることもできた。

正道寺康子は、奈良・平安中期までの古記録、鎌倉時代までの楽譜を調査することで、『教訓抄』との差異を明らかにし、物語文学の登場する唐楽・高麗曲がどのように反映されているのかを考察した。物語文学では古記録や楽書には見られない、イレギュラーな唐楽・高麗曲が生き生きと描かれていた。笹生美貴子は『うつほ物語』『源氏物語』に登場する「陵王」について詳細に検討し、「陵王」がどのように物語世界を構築しているかを考察した。上原作和は『源氏物語』『源氏物語絵巻』の音楽および紫式部の音楽環境を明らかにした。森野正弘は、『源氏物語』の音楽伝承に加え、『教訓抄』に記された他家相伝の様相や琵琶「玄上」から『教訓抄』の言説のありようを明らかにした。

今後も『教訓抄』を繰り返し読み、現代語訳の改良を行っていく過程で、奈良・平安文学との差異や『教訓抄』記載の伝説・説話の諸相が明らかになっていくものと考えられる。

上記の研究成果は、国際シンポジウム「第3回 東アジア日本研究者協議会国際学術大会」(主催:大学共同利用機構法人 人間文化研究機構 国際日本文化研究センター、2018年10月27日、於京都リサーチパーク)のパネル発表「東アジア文化圏としての日本古代音楽と文学」(代表者・司会者:正道寺康子、発表者・討論者:森野正弘・上原作和・笹生美貴子・豊永聡美、討論者:庄長華)や第9回水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」(2022年9月4日、於大東文化会館)で報告した。また、聖徳大学言語文化研究所主催講演会「平安時代の音楽伝承」(2023年3月4日、於聖徳大学)では、現地会場とオンラインのハイブリッド配信で開催したので、研究者だけでなく一般にも研究成果を披瀝することができ、約100名の参加者と活発な質疑応答が行われた。その後、これらの発表内容を『水門』31号(勉誠社、2024年2月)や『聖徳大学言語文化研究所 論叢』31号(2024年3月)などにまとめた。

なお、研究代表者は、勤務校のブログでも研究成果を公開しており、今後も継続していく予定である。

・「【コラム】打毬」(2020年1月16日、<https://faculty.seitoku.ac.jp/arts-sciences/2020/01/16/%E3%80%90%E3%82%B3%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%80%91%E6%89%93%E6%AF%AC/>)
・「雅明親王の万歳楽」(2023年3月6日、<https://faculty.seitoku.ac.jp/arts-sciences/2023/03/06/%e9%9b%85%e6%98%8e%e8%a6%aa%e7%8e%8b%e3%81%ae%e4%b8%87%e6%ad%b3%e6%a5%bd/>)

(3) 研究期間中に、日本産「葦」(鶺鴒ヨシ原のヨシ)の絶滅危機のために、日本古来の箏篋を製作できなくなるかもしれないということを知った。そこで、「鶺鴒のヨシ」についての歴史や現況をまとめ、非公式ではあるが、読売新聞大阪本社文化部に資料を提供した(2021年12月)。また、研究会などでも「鶺鴒のヨシ」と箏篋の未来について報告した(2022年3月、聖徳大学短期大学部総合文化学科研究発表会など)。奈良・平安時代から引き継がれてきたであろう箏篋の音が失われることは絶対に避けなければならない。『教訓抄』研究に携わった者として、「雅楽」が衰退することなく次世代に伝わるよう、協力する使命もあろう。

鵜殿ヨシ原研究所長の小山弘道氏に取材したり、大阪楽所・雅楽十二音会の楽師に雅楽の専門用語について質問したりする機会にも恵まれるようになった。今後、『教訓抄』の現代語訳は、「雅楽」の実演ができる方々と共有することで、さらに正鵠を射たものになると期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森野正弘	4. 巻 6
2. 論文標題 文学的接近 第10章 『源氏物語』朝顔巻の桃園の宮に集う人々 - 歴史と物語の交錯する時空 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口大学大学院東アジア研究科 東アジア研究叢書 東アジア文化の歴史と現在（白帝社）	6. 最初と最後の頁 210～236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森野正弘	4. 巻 70
2. 論文標題 『源氏物語』の内大臣家における音楽の相承 トーテム化する和琴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学文学会志（山口大学文学会）	6. 最初と最後の頁 43～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森野正弘	4. 巻 31
2. 論文標題 紹介 上原作和・正道寺康子企画・編集『DVD 古韻琴声 余明 王昭君を奏でる』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学研究（聖徳大学短期大学部国語国文学会）	6. 最初と最後の頁 57～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正道寺康子	4. 巻 31
2. 論文標題 日本古典文学における秋の調べー「秋風楽」「秋風詞」「万秋楽」-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 水門の会編『水門』（勉誠社）	6. 最初と最後の頁 77～93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹生美貴子	4. 巻 31
2. 論文標題 本邦における「陵王」の系譜 - 平安朝物語文学を中心に -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 水門の会編『水門』（勉誠社）	6. 最初と最後の頁 94～115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原作和	4. 巻 31
2. 論文標題 入る日を返す撥こそありけれ—徳川本『源氏物語絵巻』「橋姫」巻瞥見 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 水門の会編『水門』（勉誠社）	6. 最初と最後の頁 116～136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森野正弘	4. 巻 31
2. 論文標題 『教訓抄』に記された他家相伝の様相 - 多氏の『胡飲酒』『採桑老』をめぐって -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 水門の会編『水門』（勉誠社）	6. 最初と最後の頁 137～152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正道寺康子	4. 巻 31
2. 論文標題 平安時代中期頃までの唐楽「万歳楽」の諸相	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 聖徳大学言語文化研究所『論叢』	6. 最初と最後の頁 13～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原作和	4. 巻 31
2. 論文標題 『源氏物語』の作者・紫式部の楽才	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 聖徳大学言語文化研究所『論叢』	6. 最初と最後の頁 39～59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹生美貴子	4. 巻 31
2. 論文標題 『源氏物語』における舞楽の役割	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 聖徳大学言語文化研究所『論叢』	6. 最初と最後の頁 61～80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森野正弘	4. 巻 31
2. 論文標題 『教訓抄』における琵琶「玄上」の伝承	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 聖徳大学言語文化研究所『論叢』	6. 最初と最後の頁 81～105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正道寺康子	4. 巻 無
2. 論文標題 『うつほ物語』楼の上・下巻における八月十五夜の演奏会	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 室城秀之編『言葉から読む平安文学』（武蔵野書院）	6. 最初と最後の頁 133～155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 10件）

1. 発表者名 正道寺康子
2. 発表標題 基調報告「雅楽とはなにか」
3. 学会等名 第9回水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」（創立60周年記念神戸・東京合同例会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 正道寺康子
2. 発表標題 日本古典文学における秋の調べ 「秋風楽」「万秋楽」「秋風詞」
3. 学会等名 第9回水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」（創立60周年記念神戸・東京合同例会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森野正弘
2. 発表標題 基調報告「楽人と楽家、楽書の形成」
3. 学会等名 第9回水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」（創立60周年記念神戸・東京合同例会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森野正弘
2. 発表標題 『教訓抄』に記された他家相伝の様相 多氏の「胡飲酒」「採桑老」をめぐって
3. 学会等名 第9回水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」（創立60周年記念神戸・東京合同例会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上原作和
2. 発表標題 入る日を返す撥こそありけれ 徳川本『源氏物語絵巻』「橋姫」巻瞥見
3. 学会等名 第9回水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」（創立60周年記念神戸・東京合同例会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笹生美貴子
2. 発表標題 本邦における「陵王」の系譜 平安朝物語文学を中心に
3. 学会等名 第9回水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」（創立60周年記念神戸・東京合同例会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森野正弘
2. 発表標題 物語における絃楽器の相承-『現代語訳』の和琴と人物の関係-
3. 学会等名 「第3回 東アジア日本研究者協議会国際学術大会」・パネル発表「東アジア文化圏としての日本古代音楽と文学」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上原作和
2. 発表標題 東アジア琴楽史の構想
3. 学会等名 「第3回 東アジア日本研究者協議会国際学術大会」・パネル発表「東アジア文化圏としての日本古代音楽と文学」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笹生美貴子
2. 発表標題 『教訓抄』における雅楽
3. 学会等名 「第3回 東アジア日本研究者協議会国際学術大会」・パネル発表「東アジア文化圏としての日本古代音楽と文学」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 豊永聡美
2. 発表標題 日本の宮廷社会と音楽
3. 学会等名 「第3回 東アジア日本研究者協議会国際学術大会」・パネル発表「東アジア文化圏としての日本古代音楽と文学」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 正道寺康子
2. 発表標題 『つつほ物語』の音楽 外来音楽を中心に
3. 学会等名 北陸古典研究会 2023年度上半期研究発表会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 上原作和・正道寺康子・笹生美貴子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 40
3. 書名 古韻琴声 余明 王昭君を奏でる	

1. 著者名 正道寺康子・森野正弘・上原作和・笹生美貴子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 株式会社シップス	5. 総ページ数 372
3. 書名 『教訓抄』 語釈・現代語訳㊦	

1. 著者名 正道寺康子・森野正弘・上原作和・笹生美貴子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 株式会社シップス	5. 総ページ数 322
3. 書名 『教訓抄』 語釈・現代語訳㊦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森野 正弘 (Morino Masahiro) (60346541)	山口大学・大学院東アジア研究科・教授 (15501)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	上原 作和 (Uehara Sakukazu)		
研究協力者	笹生 美貴子 (Sasou Mikiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------